

ガンジーの遺産と二十一世紀の挑戦

N・ラダクリシュナン

塩津 徹訳

ガンジーが人類に残したものは何かと問われれば、真実はこの世のすべての財産よりも偉大であり、従属と暴力は真実とは相容れないということを我々に教えた、と答えることができよう。そして、ガンジーの残したものは、単なる一連の公式ではなく、むしろ、その反対に有機体として健全であり、相互扶助的であって、自立を尊重するような世界秩序について熟慮し、選び抜かれたビジョンなのである。

ガンジーは六十年間にわたって三つの大陸で公的な生活を送り、新たな社会、政治運動を先駆を切つて展開し

たが、すべての人々が変革への革命的情熱を持った兄弟として遇されているような同意による変革——それはこれまで一国、もしくは国際政治においても未経験のことであつた。寛容、同意、和解、そして生きとし生けるものすべてが団結すべきであるという深い信念がガンジーの世界ビジョンの核となつてきた。

この世界ビジョンで描かれる神の被造物すべての調和ということは、各人が本来有する善性を養い、それはまた全人類を一つに結び付ける可視、不可視の糸となろう。これはユートピアに聞こえるであろうか。確かに、今も

なお多くの人々が、ガンジーの提起した新たな社会秩序は、あまりにも理想的すぎて到達し得ないユートピアであつて、学術的、意味論的な解釈にのみあさわしいものであると信じているのである。

二十一世紀の挑戦

明日の世界、人類が直面している挑戦はガンジーの提起しているものだけでなく、他の様々なイデオロギーの再評価を要請している。急速に展開している社会——政治的、そして科学的变化は人類がこれまで絶対不動であると信じてきたものを一挙に揺るがしてしまった。神聖なものは何もない。地政的理由からくる圧制や、先進国、開発途上国を問わず、手が届くものすべてがものであるとみなす狂気は、あたかも家人が目覚める前に盗品を持ち去ろうとする夜盗のあせりと不安を想起させる。ある種の植民地本能ともいえるようなものもまた、現代人をおのれの欲望のおもむくままに導いているようにも思える。人間というのは表面は変わっても中身は変わらないのである。

このように現代世界にあまねく広まっている物質的、感覚的、消費的文化に、ガンジーはいかなる関わりを持つていたのであろうか。まさにガンジーが全生涯をかけて戦つたのが、今あげたこの三つの傾向であつたのである。

ところで、ある時代に一つの哲学が受け入れられなかったとしても、それはその哲学の死や無効を意味するのではないということは歴史的事実である、と指摘しておきたい。これまで世界を変革しようとした男女のほとんどがはりつけ、火あぶり、毒殺、死刑を宣告され、もしくは異端、破門の烙印を押された。それでもなお、彼等が自らの手で真実を追究し、獲得しようとし、不正と戦うとの意思表明をやめさせることはできなかったのである。繰り返して言うが、こうした脅威を避けようとするあらゆる企てにもかかわらず、そのような「反逆者」の数は着実に増えているということはくつがしえない歴史的事実なのである。

さて、二十一世紀を迎えるにあたって、我々がなすべき課題と対応すべき状況は以下、四つの挑戦としてまと

めることができる。

(一) 暴力という怪物を慣らし、それを管理できる範囲内にとどめる。

(二) 富と自然資源の公平な配分を保証する。そして、自然のバランスを維持するために自然に対する搾取と無神経さを抑制することを強調する。

(三) 支配者や政治家たちが権力を獲得し、維持するために宗教的感情を利用し、それゆえにますます宗教的原理主義の要素や力に依存することが増える。

(四) 道徳的、精神的、倫理的面に配慮することが少なくなる。

広がる暴力

これらの中で、最も混乱を引き起こすものとして警告されるべきは、ガンのように広がっている暴力である。次の世紀へ向かっている最大の挑戦はこの怪物をいかにして慣らすかということであろう。暴力は人類が成し遂げようとするすべてを中から侵食するだけでなく、人類を

バラバラにし、わがもの顔にふるまうのである。そして、肌があわだつのは、暴力の波紋が驚くべきほどのスピードで広がっていることである。暴力はもはや先進国や開発途上国、そして長い間植民地支配におかれた国々に特有なものではない。すべての国に広まっているのである。そこで、参考までにアメリカのワシントン特別区にある国民教育統計センターが指摘している数字をあげておきたい。

- * 毎日、十万人の子どもたちが、学校へ銃を持ってくる。(児童擁護基金は十三万五千人程度である)
- * 一日あたり、十六万人の子どもたちが傷つけられる恐怖から学校を去っている。
- * 一日あたり、二千人の青年が襲われている。
- * 一日あたり、六千二百五十人の教師が脅迫され、二百六十人が肉体的な攻撃を受けている。
- * 三十六分ごとに子どもが銃器によって殺され、傷を負わされている。一年では一万四千人を越える。
- * 一九八六年から一九九十年までに、三十五の州で

銃を使った二百五十件の人質事件が起きた。

評価の基準としての経済力

経済成長こそが発展と実力を表す真の指標であると信ずる人々に人類が支配されているように思える。金の力はどうなる場合でも過小評価できないとはいえず、人類の歴史において現在ほどあらゆる事が一人あたりの収入とか、国民総生産、相対的購買力、その他の物質的尺度ではかられるような時代はなかった。人類がつくりあげてきた二十世紀のこのような状況は、家族の絆、内面的なつながり、文化的、倫理的、宗教的、社会的側面を背景へと追いやっており、その波紋はあらゆる場所に広がっている。

我々の生活をコントロールしている人々が、人類を維持し、成長やその他のことがらを調整してきた文化的、宗教的倫理的側面を一顧だにしないという恐るべき事態を誰も悲しもうとしないのである。このことは世界に普遍的な現象となっているのであって、いずれの社会、もしくは国にとってもこのような現象は自分たちと無関係

であるとすることはできないのである。

にもかかわらず、実際に我々が耳にするのは、富の配分、兵器の削減、一度の戦争で人類を数回消滅し得る壊滅的兵器を生産している国々による核拡散の防止、インドなど現在の方法では差別的な扱いをされがちな形での核拡散防止条約推進の話し合いなどである。我々の運命をにぎる人々による危険極まりない歩みを止めようとする環境保護論者たちの警告や活発なキャンペーンも、あまり注目を集めているといえず、まとまりのあるものとなっていない。

さて、そこで、現在進行しているこのような事態に対して、ガンジーの提起したものがどのように関わり得るかが検証されるべきであろう。人類は物質的な豊かさを得るために可能な限り歩みを早めてきた。そのことはまた権利意識に目覚めた多くの人々が生存の権利を主張することによって正当化され、強化された。ところがある。物質的な豊かさを求めることは、人類の長年の偉大な成果に莫大なダメージをもたらすことによってのみ可能なものであり、我々もそのことを覚悟しておかなければ

ばならないのである。そして、このダメージはゆっくり進行する中毒どころではなく、ほとんど突然死のようなものである。

もう一つの驚くべき局面は、今は人間はどこにあってもあてにされていないという悲しむべき事実である。人はあわれにも消費者の地位に追いやられ、今もまさにそれだけである。個人の購買力がその人のすべてであると評価されるのと同様に、一国の購買力は他国がその国に對して関心を持つすべてであるとされているのである。そして、世界の資本家たちの会話は世界の巨大市場に集中し、また新聞は市場動向、株式市場、金の値段により多くの紙面をさいている。残りの紙面といえば、様々な形の暴力、政治的ゴシップ、大成功した話題、名士たちの私生活、とにかく読者に着実に興味を抱かせるような記事を掲載しているのである。

一方、読者はといえば、暴力的な文化に汚染されており、これらの記事から得た「衝撃」に満足するという消費文化に魅入られており、それはあたかも砂糖菓子を与えられているようなものである。なにゆえに人々はこの

ような類いのニュース、文化、芸術、発展などに時間を浪費するのだろうか。不幸にもこのような人々の態度にも理由があると思われる。

経済発展への警告

ガンジーは、早くもすでに一九〇九年に人類に対してこのような危険な状況についての警告を発していた。彼はその時、無節操な成長は人類を破滅の瀬戸際に追いやるということを「ヒンドゥースワラジ」のセミナー活動で指摘したのである。ところが、彼がこのことを述べた時、彼の身近な弟子たちさえも同意し難いことを顔にあらわした。我々が戦うべき害悪は我々の中にあるのであって、根本的な問題は我々がそのことに無知であるということである。

ギブ・アンド・テイク、生きかつ生かしめること、愛し愛されることが我々の人生のテーマとなるべきである。そして、そのためには、個人レベルでは、人は他に変え難い固有の存在であると認め、この個性を相互に尊重しあい、支えあうことであり、さらに、この個人レベ

ルの対応を国家もしくは地球レベルまでに広げていくことが必要である。以上のことは、まさに単純な真実ともいべきであり、このような真実を前提とする正義と公平の観念を保障し、人生の全体的ビジョンを採用することによってのみ、先の人生のテーマは実現可能となるのである。

さらにガンジーは、もし現代の文明が自然を氣遣い、また人類が自然と調和しようとし、自らの欲望を減じようと努めなければ、社会的・政治的混乱、生態的荒廃、その他の人類の不幸が起ると警告したのである。際限のない消費的傾向、諸々の価値に対する冷淡かつ無関心な態度は人類の平和への歩みを妨げるであろう。どんな形態であれ敵対や搾取の存在は人類の生存の基本的権利を否定するものである。

人生の基本的なリズムと合致する質素な生活というガンジーの遺産は、人類の古き時代の知恵を典型的に表現するものである。ガンジーは戦争は決して問題を解決し得るのではないということを人類に悟らせようと努めた。その反対に、和解は種々の問題の解決に役立つはず

である。世界の多くの思想家たちが指摘していることであるが、我々はガンジーの中に戦争のない世界を夢見る世界的指導者の姿を、そして搾取や不正が主たる潮流とはなり得ない社会秩序の推進者を見ることができるのである。

奉仕の精神

何百万もの人々がガンジーに親近感を抱いたのには、二つの重要な要因がある。一つにはガンジーが人々を鼓舞する本当のインスピレーションを提起できたということと、もう一つは彼がなら個人的、もしくは隠された欲望ではなく、奉仕の精神によってのみ働いているということが大衆の間に浸透していたことである。ガンジーは南アフリカでの実験によって彼に会ったことのない、もしくは知らない人々さえからも尊敬を勝ち得た。この点、ガンジーが南アフリカで行ったことは当時の世界で最も重要なことであると指摘した、トルストイのコメントは要を得ているといえよう。

指導者の生活はオープンであるべきであり、大衆が

リーダーを見習うほどの影響力を持つことができなくてはならない。ガンジーはこの点では多大な成功を収め、何百万の人々が魅惑的な蝶を追うように彼に従ったという結果をもたらしたのである。南アフリカでガンジーが始めた二つのセツルメント、フェニックス・アシュラムとトルストイ農場で、彼はビジョンを提起し得る天性と指導的資質を持つことを証明したのである。そして、徐々にではあるが、二十世紀初頭において、南アフリカ在住の沈黙してきたインド人たちだけでなく、その他の人々の間で理解と共感、熱狂を獲得していったのである。

新しい実践の唱導者としての生活、また私的な面での有望な法律家としての生活、その両面においてガンジーは常にオープンであった。彼は他人が所有する以上の物を所有しようとする人々をこころよく思わなかった。セツルメントのメンバーは共同のキッチンで食事をし、農場で一緒に働き、彼等のこともたちは普通学校に通った。また自分自身のために何か得ようとか、蓄えようとする欲望もなかったのである。もともとこの点、ガンジー自身に問題がないわけではなかった。というのも、そのよ

うな生活を彼の妻に納得させるのが難しかったからである。彼の妻が彼女自身のものをいくつか所有しているのを発見した時、彼は厳しい態度をとった。

そして、ガンジーのこどもたちもこのような生活に失望し、普通学校ではなく、より良い学校に通うことや南アフリカ以外で高等教育を受けようとする気持ちを抱いたのである。しかし、ガンジーはこのこどもたちの試みに反対し、セツルメントの他のメンバーのこどもたちと同じ学校に通うことを主張した。また、彼は自分の法律家としての仕事に対しても報酬の請求をやめてしまったのである。これらのことすべてが信奉者たちに彼を慕わせることになっただけでなく、可能なかぎり彼についていこうという気を起こさせた。その結果、当然のことながら、人々は喜んで彼の運動に参加していった。

インドでの非暴力運動

ガンジーがインドに帰国して最初に運動を始めたのは、釈尊に縁があるブダガヤ近くのチャンバランと呼ばれる場所であった。彼はこの静かな村を訪れ、そこでサ

ツチャグラハ運動を始め、多くの人々が喜んで参加していったのである。そのことは、もし人々がガンジーの呼び掛ける内容が自分の生活に関わることがらであり、また運動の指導者が愛、尊敬、献身の対象となり得ると認めたならば、彼の行動への呼び掛けに応えるだろうことを証明したのである。事実、人々はガンジーの中にその対象となり得る資質を見出したのであった。

その後、ガンジーの指導したアメダバードの紡績ストライキ、政府専売の塩の不買運動、政府に対する非協力運動は多くの人々が財産をなげうち、苦難を負い、傷を受けるといった犠牲をもたらす大規模な市民的不服従運動となっていたのである。この英雄的な戦いに参加した人々によってくちずさまれた歌は、予期せぬほどの力を発揮した。なにもものもこれらの人々が前進するのをとどめることはできなかった。

牢獄は活動家や、学生たちで満ち溢れ、工場さえも臨時の牢獄に転用された。しかし、それでも政府の命令を拒む人々はますます沸き上がり、増え続けたのであって、彼等を収容する余地などはなかった。そこで、本土から

アンダマン諸島に送られる囚人の例などもあった。この当時、日々、英雄的な精神が発揮され、人々は銃弾に立ち向かい、死すらいとわなかったのである。

彼等には目標を勝ち取るために前進するという断固たる決意があり、この運動は決して単なる衝動で推進されたものではなかった。この英雄的な戦いにおいて中心的な役割を演じた人物、すなわち、戦いの参加者を鼓舞しただけでなく、自己を発見し、抑圧された声を発するために戦っている数千の困窮者たちに復活の希望を与え、最後の頼みの綱となったのは、ガンジーであり、またガンジーに鼓舞された人々であった。ともあれ、この運動で刮目すべき成果が得られたのは、ガンジーが自らの質素な生活を通して彼が大衆と全く同じであるということを確認を持って示し得たからである。

ガンジーのビジョン

ガンジーは一般にいわれるような意味での哲学者ではなかった。とはいえ、彼の見解は人間の本質に関する深い理解に基づいていたのである。彼が科学的厳密さを

持つてのぞんだ数多くの実験から得た見解は、確かに哲学者のような理路整然としたものではなかったが、数多くの経験に裏打ちされた人類に対するビジョンとなり得たのである。そして、彼はこのビジョンの中で緊張を緩和し、様々な領域での人間の営みを調和的に促進する方法と方向性を探求したのである。

そのことは今世紀の後半にも大きな影響をもたらしたといえよう。マーチン・ルーサー・キング牧師が、「人類の進歩にはガンジーは不可欠である。ガンジーは世界平和と調和という人類のビジョンを抱きながら生き、思索し、行動したのである。我々が彼を無視することは危険を冒すことである」と、述べたことはガンジーの正しさを証明している。

とかく超越的な真実とやらを言明したり、やたら警句を語ったりするような聖者や哲学者たちとガンジーを同一視するならば、ガンジーの本質を見失うことになる。彼は実践的であつたのである。しかし、彼はある種の社会構造、政治構造の変革を追究したという意味では革命的であつたが、彼が採用した方法は革命に常にもなう

ような暴力的な方法ではなかった。彼はひとまとまりの選択肢を提供したのである。

暴力に対する非暴力、敵対をやめさせるための説得と和解、経済的不正を阻止するための信頼関係の確立、社会的不正をもたらしめている要因を廃絶することによる抑圧状況の改善、相互に尊敬しあうことによる暴政の廃止、欲望の限定、すべての宗教に対する平等な敬意、こうした様々な彼の主張は人類に全体的なビジョンの青写真を提供したといえる。しかも、ガンジーはエネルギー源、適宜な技術を上手に選択しながら使ったアシュラムの実験からこのことを確信を持つて示すことができたのである。

要するにガンジーは熱烈に真実を実践したのであつて、創造的、持続的であり得る選択の方法を人類に示したのである。我々に求められる唯一のことは、我々がガンジーの提起したことを受け入れる勇気を奮い起こさなければならぬということである。というのも、ガンジーの提起したことを受け入れるためには自分自身にも、そして集団的にも様々な規律を課すことが要請されるから

である。

我々がガンジーの提起した運動に参加する場合、いづれにせよ、参加してやるというような恩着せがましい態度をとることは好ましくない。むしろ、新しい秩序の形成のために喜々として活動する特権を持たない仲間と共に苦勞を分かち合おうとする自発的な意志こそ大事である。とはいえ、ガンジーのヒューマニズムは限定されたものであるというよりは、むしろそれを乗り越えようとする幅広いものである。その点、ガンジーの考えを、かの信仰復興運動と同列に見なすことは、かえって彼の創造的、革命的見解、努力を狭い型に押し込めるようなものである。

国際的影響力

ある地域では、ガンジーは、彼の影響力を受け入れ得るある種の文化的なコンテキスト（関係性）においてのみ成功し得たといわれている。確かに、ガンジーの見解がインドの文化、宗教的伝統に深く根ざしていたという事実は否定できない。しかし、ガンジーが二十世紀の最

初の二十年間、遠く南アフリカで人権と市民的自由のために戦い、そこで勝ち得た成果は、後にこの地でガンジーの戦いの方が採用されるという形になって現れたのである。

たとえば、ネルソン・マンデラはすべてではないにせよガンジーの方法を取り入れた。そして、前南アフリカ大統領であつたデ・クラークもそれに続いて、和解と許容という方法をとることによってガンジーの影響を受けていたことを示したのである。これらのことはガンジーが南アフリカで費やした二十一年間は決して虚しいものではなかったことを物語っている。

一方、アメリカ大陸ではマーチン・ルーサー・キング牧師がガンジーの思想にそつて市民的自由のために英雄的に戦つた。彼もまたガンジーから運動の戦術を学んだことを認めているように、ガンジー戦術の妥当性は決して地域に偏つたものではないのである。そして、特にドイツでは緑の党がいかにして人間の良心を喚起するか、また党の戦略を有効に機能させるかに関して、ガンジーの方法を採用したのである。この党のリーダーであるベ

トラ・ケリーの大胆な主張はガンジーに影響されている。

以上のことから、ある種の哲学もしくは思想が有効な働きをするかどうかは、決して一因、あるいは一つの大陸の文化的伝統に依存するものではない。むしろ、人々があることに對して喜んで受け入れる用意があるかどうかであることが理解されよう。そして、ガンジーのビジョンとアプローチが、自由のために戦う人々、社会改革者たちの効果的な武器となった例を世界の各地でみることができるのである。

ユネスコ宣言との共通性

ガンジーは何か新しいことを教えようとしたわけではない。事実、彼はそのような使命を持ったことはない。一度ならず言明している。彼がいつているように真実と非暴力の主張は山々と同じように古くからある。彼はただこの二つの驚異と偉大さを再評価し、理解しようとするのである。そして、彼はこのことに関連して次のように語っている。

「我々は単なる個人的ことがらではなく、集団、共同体、国家に関わることがらとして、真実と非暴力を実践しているのである。とにかくそれが私の夢である。私はそのことを実現するために生き、死にたい。このような信念によって私は日々新たな真実を発見している。アヒンサー（非暴力）は魂に本来そなわっているものである。それゆえ、日々の生活のあらゆる面ですべての人々によって非暴力が実践されなければならない」と。

「戦争は人の心の中から始まる、それゆえに人の心の中に平和の砦を築かなければならない」と記すユネスコ宣言の前文と、「世界は非暴力によって進歩するか、暴力によって壊滅するのか」というガンジーの主張との間には驚くべき類似性がある。ガンジーの南アフリカでの二十一年間にわたる英雄的な活動、そしてインドでの三十年を越える活動から、人類の進歩を可能とする社会への平和的移行のための戦略の青写真が得られたのである。人類の進歩を可能とする社会とは、様々な形態の生命に敬意が払われ、人間の尊厳が守られ、自己の尊重、他人に対する寛容が重視されるような社会である。

我々は一九九四年、ガンジーの戦略と哲学がいかに有

効であるのかを見ることができた。ガンジーが百年近く前の一九〇三年に南アフリカで開始した戦いが実りを結んだのである。すなわち、南アフリカでは黒人と白人がともに権力の平和的移行のために活動し、その結果、マデラが権力を掌握したからである。世界各地の政治的覚醒と自由のための運動、そして、敵対する集団同士が相互の感情を尊重し受け入れることを促進する非暴力戦略の採用、これらのことへのガンジーの貢献は、人類の生存のための寛容を訴えたユネスコの決定と共通するものがある。インド亜大陸、そしてアフリカ大陸では権力の平和的移行と社会変革を目にすることができたが、それも様々な運動方法を持ったガンジーのイニシアチブによるところが大である。

ガンジーの教えと戦略を際立たせる最も重要な点の一つは、目標を達成するためにそれにふさわしい手段をとったということである。彼が政治的価値に基盤をおいたのは彼の新しい世界ビジョンの一部分にすぎなかった。ガンジーは精神的、倫理的な基盤を欠いた政治は人類を

維持できないと強調しているのである。

（N・ラダクリシュナン、インド・ガンジー記念館館長）

（しおつとおる・創価大学助教授）

（本稿は一九九五年六月九日にパリのユネスコ本部で開催された青年代表者会議での討論のために用意されたものである）